

エッセイコンテスト 2 等賞

「フランス語とわたし」

H.M

私がフランス語を学びはじめたのは大学 1 年生の頃であった。フランス語の美しい響きに特別な魅力を感じたものの、大学の授業は文法中心でやや退屈だったこともあり、その時はそれほど熱心に取り組むことはなかった。しかし、Ce qui n'est pas clair n'est pas français（明晰でないものはフランス語ではない）という言葉だけはなぜか強く心に残り、折に触れてデカルトやパスカルをフランス語で音読することを続けていた。フランス語の明晰さに惹かれた私は、日本語で文章を読んだり書いたりするときにも、フランス語のような明晰な論理構造を強く意識するようになった。この経験は、大学において法学を専攻し、国際法学の研究を目指す上で大切な基礎となったと感じている。

私がフランス語に本格的に取り組むようになったのは大学院を卒業してからである。法科大学院を修了する直前、私はニューヨークの国連において1週間インターンをする機会を得た。国際会議においては、英語と並んでフランス語が用いられる。フランス語で発言するだけで、その場の雰囲気は大きく変わる。言葉には、情報を伝えるということ以上の力がある。フランス語は、聞き手の心を一瞬でつかむ不思議な力を持っているのである。国内外の至るところで英語一辺倒の風潮がますます強くなっているからこそ、フランス語の意義がとても大きくなっていることを実感する体験であった。

国連においてフランス語の力を目の当たりにした私は、アテネ・フランセで活きたフランス語を本格的に学ぶことにした。熱心なフランス人講師による上級講座はレベルも高く、ついていくのが大変であったが、次第に講師のフランス語にも慣れてきて、毎日 RFI や France Culture の Podcast を聴き、シャドーイングを続けるうちに、速いスピードの専門的なフランス語でも大体の意味が把握できるようになってきた。その後、なんとか Diplôme には合格できたが、いまだに Brevet のレベルには遠く及ばない。今後も、地道な努力あるのみである。

私の夢は、フランス語圏への留学・在外研究を通じて国際交流に貢献することである。「『互いを思いやる心』の交流が根底にあれば諍いなど生じる筈もなく、ましてや戦争などは起こりえない」（齋藤晴比古『ドクトゥール白ひげ 対フランス交流記』127頁）。対仏学術・文化交流に尽力した経験を踏まえて齋藤晴比古先生が力強く説く「崇高な人間学」は、二度にわたる凄惨な世界戦争の反省にたち、少しでも安定した国際平和の枠組みを探求し続ける現代国際法の目指すべき方向性を照らす基礎理念としても、いつまでもきわめて重要な意義を持ちつづけるであろう。

まだまだ私自身の道のりは遠いが、フランス語で学術文献を読み、国際会議をフランス語でこなせるようになること、さらに、世界平和に向けた「心の交流」へ少しでも貢献することを目指し、アテネ・フランセでの学びを続けていきたい。